

素蘭 短歌集

平成十二年七月より平成十四年十二月まで

全五七二首

千年の文待ちたれど君の見し花は幻虚空さまよふ

我が咎と知りし時より幾夜経て君の言葉をここに聞くとは

異空間君と我との来し方は行く末とても仮想現実

水喰らふ針葉樹林痛ましく祖父亡きあとの山は荒れゆく

散りそめし花に誘はれ見る夢は淡雪のごとはかなに消ゆる

別れ雪白線流す手をかさね「理想」といふ名の荒野見つめる

少年の心宿せし君なれば銀河鉄道天空をゆけ

暗闇を切り裂く命見つめてる線香花火の燃え尽きるまで

権力の継承謀る人々の驕り生みだす民の無自覚

瀬を早み流れ流れて明日香川変わりゆく世のせせらぎ聞こゆ

君送る君の愛でたるこの庭の紫式部いとど悲しき

グリザベラ ミストフェリーズ タントミール ジェリクルキャッツが舞台に跳ねる

枯葉舞ふ街角衿をかき合はせ家路を急ぐ人々の群

教会の鐘の音遠く聞きながら見つめ合ひたるあの日に帰る

新雪にシユプールゆるく描きつつ滑り終へたる朝のすがしさ

我が内の鬼と戯る花の午後纏へる綺羅をひとつ脱ぎ捨て

想ひ出の糸をくるくるたくり寄せ織りたる布は淡き水色

セージ パセリ ローズマリーを籠に摘む『スカボロー・フェア』を口ずさみつつ

選挙へと心早くも走るらし「励ます会」の招集かかる

やりきれぬ現実穴をうがちたし時代閉塞啄木の世も

ヒマラヤの峰をはるはる越えてゆく鶴のひとむれ奇跡見ること

冬ざれの心を癒す歌もがな言の葉ひとつ闇に放てど

語らへど心通わぬ日の果ては言葉の無力噛みしめてゐる

パソコンに向かって互ひに愚痴こぼすメールで飛びかふ交換日記

などかくも君はこだはるうつそみの君の心の花にあらぬを
などかくも君はこだはるうつそみの君の心の花にあらぬを

この道はわれの選びし道なれば迷ひとまどひされど歩めり

君恋し君は遙けき神の國小笠原なる海に消えたる

天空に奏でられたるオーロラの幻想曲にしばし佇む

古きこと思ひ出させるはつ冬の雨に打たれて今日は帰らう

空襲の爪痕幹に宿しままあまた実こぼす公孫樹ひともと

美辞麗句尽くせど心空疎なる文字の羅列と広報誌読む

ガラス戸のむかふに見ゆる日常を歌に詠みつぐ子規偲びつつ

抽出の奥から転がり出るやうに忘れなきこと甦りくる

世紀末のパリにあふるるデカダンス ランボウの詩に憧れしころ

天地の寄り添ふところ切々とユーカラ謡ふイヨマンテの夜

過ぎし日をつつつの夢に追ふごとくあえかに降れる吉野白雪

八重葎茂れる里となりてなほダムとなりゆく村を恋ふ人

ポケモンの名前すらすら挙げれども絶えて聞かざる童歌なり

イカロスの翼をもちて翔けゆけり美(は)しき神ゆゑ焦がるる空に

地図帳に見る世界事情火薬庫の国境国名こころ変わる

蛮声に奇声嬌声唱和して世紀末なるカオスの世界

秋の野は薄・刈萱あるものを泡立草の黄色目につく

かの地にて求めし香を焚きひとり記憶の海にしばし漂ふ

小石蹴り蹴りつつ帰る夕まぐれ幼心に秘めしことあり

春色のパシユミナふわり肩にかけ街に駈けゆく若さともしき

白式の翁が舞へる能舞台たうたうたらりと鎮まりてゆく

降る雪と見紛ふばかりに乱れ飛ぶ蜉蝣のごと命果つるか

煌煌と天狼星は輝きて昴・オリオン星の饗宴

草原に蒼きシリウス煌めきて騎馬民族の末裔照らす

暴かれて褐色砂岩の墓を出づミイラマスクの美(は)しき少年

暮れなずむ街を彩る電飾に櫻並木の痛ましくもあり

出す当ても無きまま手紙書き散らす夢臙なる春の余白に

縦の木を求めて森に入りし日をふと懐かしむ父の記憶と

凍て菊のひと群残る冬の庭滅びゆくもの思ふ黄昏

「アヴェ・マリア」闇にながるる聖夜には雪恋ふ心われに戻り来

白龍の漁（すなど）りすらむいにしへを花降る午後の夢に追ひたし

恋唄に天気予報を読み込みし 寺山修司在りし日偲ぶ

夕暮れの丘にたたずみ聞く風はイーハトーヴに響くセロの音

ミサ曲を奏でるチェロに瞑目し聖夜旅立つ人を悼まむ

激動の世紀といへど人の世の変はらぬものをゆかしく思ふ

ヒマラヤの峰よりたどる蓮の国 転生児童逃れゆきたり

かの日にはおとぎ話のやうだった 『2001年宇宙への旅』

裸木となりて櫻の美しき樹形眺むる冬ざれの街

日常に離（あ）るる心を癒さむと真夜にひとり言葉を紡ぐ

二十一世紀迎へし今日の日に賀状あらたむ つつがなしやと

天翔る八尋白鳥東征の皇子は『古事記』の叙事詩となりぬ

花野来て花に尋ぬる幾度ぞ人の心のはかりがたきを

木喰の上人ひとり旅にあり天一自在身を捨つる身は

しんしんと雪は降りけりたちまちに白き闇なる街道をゆく

山巔に遙か銀嶺眺むれば天啓といふ言葉を思ふ

足たたばヒマラヤの雪くはましと子規は詠みたり 無念を思ふ

草原の風に吹かれて佇めり ひとり夜空の星を数へて

ひそやかに息づく闇に星降りぬサザンクロスをふたり見つけて

吹上の浜の秋風さやさやとさやぐ夕べに百千鳥鳴く

雪降るや遙か連山隠しゐて鈍色雲の低く流るる

初空を茜に染むる日の神の浴（あ）みする川は清らに流る

水仙の香も雪のなか海岸にナルキッソスの面影見つめ

船団の消えゆく影追ふ口力岬ここに地は果て海は始まる

罪深き君なれ我なれ一日をタゴール詩集読みて過ごしつ

暁（あかとき）のラジオ講座はただ眠く夢では解けた数列・行列

高層の窓に寄り添ひ黄昏が夜景となりし街を眺むる

微睡みのなかに聞こゆる虎落笛 笛吹男夢に追ひなむ

思ひ出の街今のわれには遠けれど夢もうつつもきみに逢ひたい

何時だつて夢の途中でゐたいけど虚飾の街に漂つてゐる

モカマタリ カフェ・カプチーノほろ苦く思ひ出すのはあの喫茶店

人嫌ひ人恋しさのせめぐ夜はアダージオ流るる部屋に籠もれり

風花となりて舞ひたき心地する暗き御堂に仏座せど

空青く海あをくして白鳥はただに白けり 歌人のごとく

夕映えに豊かなるかな麦秋の近江の里にひとり佇む

はらはらと降りける雪に生（あ）れし日の雪の深さを思ひ重ねつ

遙かなるきみに寄せたるわが思ひ朧なる夜の間に溶けゆく

振り向けばいつも君がゐたあの夏の日の輝きを胸に秘めつつ

異国より今また伝はる惨状に神戸の街のかつてを思ふ

魂の慟哭聞こゆ異国（こごとくに）の獄舎にありて詠める歌より

恵まれし者の優しさ拒みゐて友は悲しみただ深めゆく

頼政に射られし鶴はうつほ舟蘆屋の浦に浮きつ沈みつ

波風も静かであれと念じつつ君を見送る大物の浦

激戦の名残とどめし環礁の波のまにまにわれも漂ふ

春風とスクランブルを駆けてゆく君の待ちたる黄昏の街

群時雨一樹の陰に宿りなば慰むること蟹は戯る

参道に雪降りつみて鎌倉は今宵鎮めり 昔語らむ

玉椿紅く淡くと染めゐたり雪解雫のきらめきのなか

霞たつ熊野古道を辿りなば花訪ふひとの影ぞ恋しき

チャット中オネエ言葉も板に付きゲンジツなんて忘れそうだわ

水無月の晦日にくぐる茅の輪にて荒ぶる神を被へ和める

春を待つ初天神のにぎはひに絵馬を奉ずる受験生見て

彫金の鈍音かろく響かせて無口となりぬ工房の午後

あかつきの女神籠もれる天空の光の宴（うたげ）オーロラを見ゆ
朝霜の白く置きたる地を割りて露の芽吹ける 春を告げむと
ラファエロの描きし聖母たをやかにルネッサンスの息吹伝へる
子を思ふ母の心を十六夜の日記に綴りいざ鎌倉へ

暮れてゆく春の岬のかもめ鳥 旅立ちたまへと風や吹くらむ

有明の海のゆりかご諫早の干潟追はるる生命いづこへ

近未来描く小説読み終へて明るき明日またも翳りぬ

霧深き海に光輪あらはれて祖国とふもの見つめてをりぬ

雨だれの音聞きをれば初夏のシヨパン弾きたる君を思へり

いにしへの道の国なり近江路はからくれなゐに深山染まりぬ

小澤塾若きオペラに喝采の声は至福の余韻となりぬ

面影にたちたる君は花ねむの吉祥天のごとき貌して

雪野原色とりどりのフリースで駆けつまろびつ児らは遊びぬ

「情熱のアロマ」と歌ふ陽水の色に染まりぬ『コーヒー・ルンバ』

ジアンジアンにプラネタリウム渋谷より撤去さるらし春惜しみつつ

赤道を越えたる旅ぞ漆黒の夜空の北に仰ぐ白鳥

城壁に立ちて叫びしカテリーナ 塩野七生のペンに息づく

雪降れば托鉢とてもままならず五合庵なる漂泊詩人

亜麻色の髪なびかせて乙女子はふらここ揺らす春の夕暮れ

如月の海蒼くして水底に沈める船を嘆き見やれど

空洞化嘆く声さへ力無く老舗一軒のれん下ろしぬ

早春の風に乗りたき心地して三色菫窓辺に飾る

「樹齡は」と問へど答ふる人もなき父丹精の盆栽残る

『冬の旅』第五曲なる『菩提樹』を合唱せしこと淡き思ひ出

虚辞虚勢張れども心露はなる臆面もなき言のあはひに

不穏なる地殻の軋み何処よりいつまた地震（なぬ）の報や届かむ

世にあらむ刹那耀ふ結晶のあはれ淡雪水に還らむ

菜の花の香ほの匂ふ水郷をそぞろ歩かむ春の夕暮れ

卒業といふ二文字に送られてかの日かの時別れ告げたり

梅が枝の一節春に囁ける源氏の君のいとどめでたし

ほのぼのと春思はせる霞きて雪の嶺にも淡き色差す

ほのぼのと霞初めたる春の日は空に透きゆく口笛（ふえ）とならまし

初夏の夜空いろどる乙女座の女神麦の穂持ちて麗し

天帝のみます紫微垣（しびえん）北辰を衛るべしとぞ古歌にはあれど

かくすればかくなるものと知りながらなほ言ひつゝのる人の世の闇

渓谷にかかる吊橋今訪はば幼目に見し景や褪せなむ

里人の守りたまひし薄墨の桜今年もいのち咲かせむ

やはらかに芽吹く雑草（あらくさ）踏みしめて野辺にたちなむ風となるまで

白樺の樹に囲まれし湖畔より白き帆あげてヨット繰り出す

夢十夜君を恋ひをる百年の後の白百合風に揺らるる

春雨に蔓薔薇枝を伸ばしたり弥生の空を絡めとらむと

繁殖の春を迎えし百鳥はサンクチュアリに囀りやまぬ

戯れに石を投げたり日照の海に向かひてひとりしあれば

風薫る五月の森に降る雪か なんじゃもんじゃの花の白けさ

美德説く人の言葉を空言と聞きたることの空しくあれば

春雷のはつか聞こゆる遠空に円を描きて鳶鳴きわたる

三井寺の鐘の音わたる鳩の湖（うみ）藍と茜に満ちてともしき

激戦の地の壕中にありてなほ人は悲しき歌詠みつげり

隅田川母の思ひはいやまさり涙雨降る梅若の寺

恋ふ人の心はかれぬ春の夜は思ひ出胸に転がしてゐる

LUNATIC 月に狂ふは人の世の習ひなりしか心あくがる

秘め事のやうなる月とわれの宴言葉の海に光満ちたり

裸木はうすくれなゐの羅を纏ひ桜驕りの春を待ちけり

春風邪のうつらうつらもまた楽し飛行機雲を夢に追ひつつ

片栗の花むらさきにまつはりて春の女神の蝶は舞ひたり

ふらここをひとり揺らしてまぼろしのみみに逢ひなむ春の余白に

混沌と喧噪満つるパサールにアジアの民のぬくもりを知る

パンドラの匣をいだきし旅なれば希望とふ名の歌詠みつげり

万葉の歌碑辿りたし菜の花と桜彩る山辺の道

春は杉・檜・鴨茅次々とアレルゲンなる風媒花咲く

一陣の風み吉野の花散らし弥生の空を染めて流るる

三月の道路走ればここかしこ工事ばかりで穴ぼこだらけ

メキシコの森に紅葉の擬態してあまた舞ひたるオオカバマダラ

生（あ）れし日の雪の深さを聞きをれば闇より降れる雪を恋ふらむ

春の夜の神秘なるかな黒蝶は疼き孕みて真珠（たま）を生ませり

ちさき穴殻に穿ちて祝祭の卵飾（よそ）へり春待つ午後に

雪解けの水分かれゆく高原に水芭蕉咲く四月来たりぬ

老紳士ビュッフェのケーキ選びをり、*Eanie meanie minie moe...*（どれにしようかな?）

何処へと鳥帰るらむ黄昏に浜辺さまよふわれを残して

救済を歌に求めし受刑者の三十一文字に自由あれかし

一台の自転車貴重なりし日の哀切描く『自転車泥棒』

二本（ふたもと）の桜湖畔に花散らし実生の命育みてゆく

やはらかに若木の桜舎（ふぶ）まりてはつかに咲ける春を待つらむ

蒼き花野を海原に変えつらむ土筆坊やは波と戯る

悲しみはまだ明けぬのか喪のあくる君よりこない賀状せつなし

うつつにはあらぬ夢路に漂ひぬわれを演じて疲れし夜には

天空に光奏でる交響詩恩寵のごとオーロラを見ゆ

早春の画廊に淡き色あふるパウエル・クレーの油彩画ありて

鶯の来鳴きてやまぬ里山にけふは初花咲くを愛でたり

郷愁と幻想と愛シャガールの絵に靈感の花嫁は舞ふ

きみのあた去年（こぞ）の浜辺の桜貝耳に寄せれば海鳴りの音

ヒマラヤの嶺より落つる雪解けの水に還りく砂の曼陀羅

真つ白なノートを開く心地する四月新たな門出祝ひて

介助犬連れて学門くぐりたる三年（みとせ）の辛き試練を耐えて

清滝へ紅葉の溪を山桜うすくれなゐに霞染めたる

神苑の水面に映るくれなゐの枝垂れ桜に春は闌けゆく

湧水の溪を覆へり花霞うすくれなゐに色を重ねて

みちのくの旅の終はりの水湊灯ともしごろに花は舞ひ散る

放課後のコートに躍るきみを見てわれは佇（た）ちをり残照のなか

心当てに君を待ちをる春の苑夕闇甘く揺れるブランコ

猛りくる波と空とのあはひにも光は満ちてターナーの海

一筋の雲曳きながらジェット機は空と海とのあをに消えゆく

夕桜はやも散りける川面より雁飛び立ちぬ 心残さず

薔薇色の薔にある春愁ひ鬱金桜の夢ならなくに

懐かしき歌はいつでも別れ歌 手首の傷などわれは知らぬに

花の宴朧月夜に果てぬるをかたみにかはす扇眺めつ

源平のゆかりならずも紅白に交じりてゆかし 桃の花咲く

空色の切符に心さすらへば銀河鉄道十字座をゆく

砂漠より運ばれいでしロゼッタ石ヒエログリフの謎解きせむと

光より生れし宇宙か御仏は美色纏ひぬ星の曼陀羅

ほととぎす雲居の空に名告りせば弓張月の武者を偲ばむ

日常に離（あ）るる思ひを語らむと真夜にひとり言葉を紡ぐ

形心の危ふき岐路にきみ佇ちぬ哀しき玻璃のモザイクに似て

天山にある光は雪解なし海を恋ひたる水は激ちぬ

湧水の溪渡りゆく鷺の声うららかに春は闌けゆく

砂に書く名前はかなき春の海思ひ寄すれど波に崩るる

砂に書く名前儚き春の海寄する思ひも波と崩るる

折れさつな月に抱かれし夕星（ゆふづつ）の耀ふ空に春は暮れゆく

片栗の伏せたる面（おも）にまつはりて春の女神のみどり児遊ぶ

青深き空に一閃の皓をなし遙かなる嶺鶴は越えゆく

願はくは鳥の夕闇朱鷺色に染めたる夢のうつつならまし

ふと思ふ家路を急ぐ夕まぐれ 心の駅はあるのだらうか

さみどりの小径たどりて月光の菩薩に見（まみ）ゆ春の名残に
帰らざる日々なればこそ恋ひしかれ公孫樹並木の続くキャンパス
夕雲雀空に焦がれて焦がれ落つ五月の野辺を子らは駈けるも
異国より届きし友の花便り林檎の甘き香に酔ひたりと

転校に転校を重ねしわれなれば賀状に思ふ過ぎてこし地を

公立を厭ふ風潮加速してちさき戦士ら橋渡りゆく

言の葉のひとつ惜しむにあらねどもわが咎を知り秘めしことども

あの頃にこの治療法ありせばと夭折せし娘（こ）を母は嘆きぬ

毛馬堤三々五々五々は黄とたんぽぽ踏みて蕪村歩めり

ながむれば朧に消（け）ぬる夜半の月なほも見つれど雲こぼるる

古き家の軒に絡める山藤の花紫に秘めし想ひ出

手荷物は等身大の縫ひぐるみロイヤルバレエの少女機上に

うつし世の哀しみ己（おの）がうちなれば透きたる玻璃の色を愛でたる

若草の丘にのぼりて見晴るかす海と空との溶けあふところ

新参のホームレスなるか横顔の鼻梁高さが心惑はず

生（あ）れかはる星は宇宙の真闇より幾億年後の便り届けむ

開闢の初めにありとふビッグバン 神を信じぬきみ説きたまふ

外洋のうねり寄せくる桂濱像となりても南溟を見む

青林檎さびしき人のこころもて置かれし部屋のかをりすがしく

閉館となりて久しきシアターに通ひつめたる日々なつかしき

くれまちす・あやめ・おだまき・あぢさゐのむらさき匂ふはつ夏の苑

白薔薇夕くれなゐに染まりつつ吐息のごとく花を散らせり

こがねづく麦の穂揺らし風わたる初夏の空スピカ麗し

六道を見しとふ女院ゆかりなる大原の里に何思ふべし

しなやかに地に下りたちぬ猫族はネットに購ふ本携えて

褐色のサハラ砂漠に咲ける薔薇 砂漠の薔薇に心慰む

またひとり冒険家死すかの人もジュール・ヴェルヌを読みたる世代

ぬばたまの夜をあかかかと電腦の海に溺るる漂流者あり

つかの間のエトランゼなり帆船の行き交ふ海に思ひ馳せれば

夕光の海広がりぬ岬には悲しき秘話のあまた残れど

はつ夏の山辺彩りたよたと雨に打たるるあぢさゐの花

面影のきみとこしへにうら若く年ふることのなきを淋しむ

ハイブリッドなる穀物の席卷に種苗ビジネスいよよ栄える

鈍色の雲と雲とのあはひより放射となりて光洩れくる

あぢさゐの濃きむらさきの色さして黄昏てゆく六月の宵

梅雨間に白き十字のほの明かり日陰の花の愛(かな)し懐かし

残照に映ゆる内海風はらみ小(ち)さきヨットの帆影となりぬ

眺望のひらけしところ背のザックおろして憩ふ心地良き風!

掴まんとすれど指間を逃れゆく霧のやうなるふたりのこころ

懐かしき声友の死告げたれば追憶といふ小径たどりぬ

まなかひの君澁刺と笑みたるも紫立ちし雨に翳りぬ

外つ国に赴任せし間の近況を綴りてくれし手紙色あせ

猫の仔のまどろみあたる昼下がりにさわさわ和毛(にこげ)靡かせ

神話などとうに崩れて幼らの心に傷の癒し難かり

いとけなき児らに刃は刺すものか痛みを知らぬ憎悪の果てに

人体もまた小宇宙さればこそ光と闇の相剋の旅

DNA解析すればみなひとはミトコンドリア・イブなるといふ

稼働せぬ もんじゅ の智慧を御すといふヒトの業には暴走なきか

キャンバスに青塗りこめし哀しみは薔薇の翳りにピカソ誘(いざな)ふ

生殖も治療も科学なりし世に手のぬくもりを忘るなと願ふ

千年を経てみづみづしき恋の歌 ひとは悲しき恋するものぞ

名も知らず路傍に咲ける雑草(あらくさ)を愛でつつ歩むはつ夏真昼

看板に偽りのやうな綺羅まとひ空漠論議低きに流る

太陽を一周するに165年海王星の四季とは如何?

日の神の馬車御しがたくパエトンはゼウスの雷に打たれしといふ

検証を厭ひ叙情の微温湯につかりしわれを冷めて眺むる

北国に遅き春告ぐ白玉のつらつら椿つらつら愛し

古唐津の碗に描きて偲びしか海に隔たる野辺の八千草

いにしへの恋物語追ひながらたどる古道に鶯を聞く

土手道の行く手はばみて蔓性の草はびこりぬわがもの顔に

西国の満願寺へといく鐵路廢れしのちに草や覆へる

もくもくと雲のわきたる壁紙を貼りめぐらせし小児病棟

みちのくの旅の終はりに眺めしは雪いだだかぬ伊吹靈峰

魚影追ひ静寂の波にたゆるるとき魚眼レンズのわれとなりたき

バーチャルの吟行なれど母川にきみと螢を追ふも楽しき

くろぐると水を湛へし奥つ城のたまづさなれば螢恋ふらむ

夕闇にひとつ光れるほうたるを追はば真闇へ迷ひ入りなむ

アンタレス・マースふたつの赤星が消ぬがちに見ゆ 不穏なる空

七つ星背中にしよへる天道の陰陽となり時は廻らむ

園児らの飾りし竹の短冊に今様事の願ひ多かり

凍て空に愛でし昴もビーナスも消ぬる夏空月の耀ふ

酸性雨日常化してカルシウム日々溶かさるる日本列島

銀色のアルノ流るるフィレンツェの街回遊する若き旅人

葦の海分かれし壁を預言者の閉づるもあはれファラオの民に

葦の海分かれし壁を預言者の閉づれば水もあはれファラオの民に

闘争の季節過ぎたるキャンパスにアンノン族の跋扈始まる

果無の熊野古道の道半ば路傍に小さき墓しづもれり

安曇野に湧きいづる水涼やかに溪潤せり花山葵咲く

離島までワンデイ・トリップ甲板に浴びる陽射しを怖ぢげざること

今天女迦陵頻伽の衣まとひでんぐり遊ぶ宇宙空間

コンパス座ぼうえんきょう座南天は航海時代の名残に満ちて

掌中に慈しみある玉繭のからこころからと咽響(とよ)もして

六本の尖塔聳ゆコーランの聲あふれくるブルーモスクに

無名者の声なき声にあふれしむ無言館とふ哀しき器

新しき村 にたまねぎ・かばちやなど眠りし人とともに育つや

クーベルタン男爵の遺志ほど遠き五輪貴族の集へる館

塞翁が馬の連れ来し暴れ馬乗るか乗らぬか決めかねてゐる

ぬばたまの夜毎身を焼く篝火に手綱とられて潜ける鵜はも

なまぬるぎ風に吹かれてそぞろ歩く逢へぬ今宵に二星またたく

いなづまの蒼き光は闇を裂き心惑はず花火にも似て

うたかたの恋たまゆらの命とやはかなごとのみ思ひいづる夜

白亜紀の樹々の涙のアモルファス琥珀は虫のタイム・カプセル

吾孀の弟橘のゆかりなる孀恋村に乳の道見ゆ

天空の恒河なりしか夕闇に黄道光のはつか流れて

茜さす酸漿ふふみ遊ぶ児の夕焼け空に焦がれゆく夏

今生のいまが良けれといふひとの卵波のごとき半生も良し

生命の起源は海の微生物ゲノムは昏き海を忘れず

ウルトラの故郷といふM星雲 薔薇・鷲・帽子見れど飽かざる

若女・万媚・深井と面打の暴く加齢の宜なりけるを

過熱する都会に百鬼夜行して眠れぬ蝉がひとしきり鳴く

沖つ海眩しき蒼き漁り火のほの揺らぎぬて溼を照らしぬ

夕茜あかあか燃えて八月の空に挽歌を蝉歌ふらむ

日本史は大正までかと思つてゐた歴史教育 我等の時代

からからと笑ふ骨すら残らない8月6日の石の階

如己堂に綴りし文の褪せぬがに今日長崎の鐘は鳴るらむ

敦賀へと単身赴任しゆくきみ危険手当の高さ眩く

あまも生ふ小暗きかげよりちぬいでて光の粒を吐きて過ぎゆく

透きとほるものいとしさスケルトン時計支ふる歯車の音

銀輪の抜きつ抜かれつ野に消ゆるミラーグラスのアスリートたち

ちやん付けでわれを呼ぶ友ばかりゐてほぐれてゆきぬ同窓の宴

本質を問はぬ論議の幕切れを終結とやいふ先送りとや

歴史とは愚行に学ぶことだらういつか来た道歩まぬやうに

道化師の自在に繰るるトランプのトランプトリック騙し絵の国

哀しみはたとへば真昼ゆやゆよんとふらこ揺らす道化師とぬる

篝火はほのか揺らぎて夕顔のあだし夢へとわれを誘ふ

夕暮れて千燈萬燈ともさるる石の仏は秘めて語らじ

濁流はこんな間近に来てゐたとのちのち思ふ決壊の夜

防波堤かるがる越ゆる荒波に高ぶりてゆくわれもまたぬる

言霊のさきはふ國に夜ごと夜ごとサザンの唄の流れけるかも

旅僧の問はず語りにももの狂ふ胡蝶なるべしあかときの夢

法師蟬つくつく語る愛宕山連歌のえにし今に偲はむ

散らすまへに数えてしまふ束の間の予定調和のなかにゐたくて

ぬばたまの黒髪は死語茜さす君らが髪を嘆きつつ見ゆ

五メートル四方満たざるエレベーター茶髪金髪錦綾なす

定型といふコスチューム翻し放たれてゆくファントムがある

ハンマーに打ち壊さるる壁がある心の壁は越えがたかるも

山峡に語りわたらふ人の絶え巨きダムへと貢がれてゆく

ふたもとの桜に遅速ありぬべし咲くも散れるも果ては枯るるも

アキレスと兎の駆けつこあやかしの話術巧みに忘れがたかり

ほろ苦き思ひ出ばるばるこぼれくる掠れ掠れの八毛二力の音

ふらんすの野のこくりこの火の色の思ひにそまる歌をしぞ思ふ

言葉ひとつ選りて歌詠むひつそりと醸されてゆくワインのやうに

つれづれに聞く虫の音の絶ゆるとき雫こぼるる真闇と思ふ

座右には何置かるらむ九夜を過ぎて筑波の道をゆく君

菊坂の路地の暮れかた一葉が匂ひたつやう十三夜の月

蛇穴をいづればアダムとイヴ達がうすくれなぬのヴェールをまとふ

恒河沙となりて降りくるものした眠れぬ夜に抱かれて眠る

逆縁の子のまたあまた生まれけむ言葉とどかぬ君を淋しむ

ひとりづつひとりのしづもるかげ連れて疾走してゆくMYSTERY TRAIN

既視感のなかの映像日常がルビコン河を渡りはじめる

夕暮れて川面に群るるかげるふの生けるかぎりのいとなみ見つる

語られぬ言葉のあはひおのづからあらはるるあり何を語らむ

ひとりづつひとりの主張さはあれど言葉尖れば居づらくなりぬ

不興なる羽音つとみて蠅打てばたくましき卵しらじら笑ふ

秋茜群れ飛ぶ野辺のほむらだちさねさし相模の恋はかなしも

緋の色を並めてさびしき曼珠沙華暮れなづみゆく海を見てゐる

海上に道はありけむ干瀬（ひし）が彼方虹たつ朝のほがらに見ゆる

利尻富士仰ぎて礼文かしこまる桃岩荘は健在なりき

神話とは虚構なりしかパンドラの匣放たれて災ひ満てり

ときじくのかくのこのみの恐くも誰が手にあらむ誰が手に取らむ

満ちて欠く月のならひに生れしより身ぬちをめぐる月の幾許

しみじみと来し方見つむ日も良かれ金木犀のかをりたつ朝

くもりなき月あらはるる今宵にぞ昔をとこのまなかひに顕つ

十六夜の月あきらかに薄野は銀の笛もて童子がさやく

まめまめしき書はまさなけれ更級の月影飽かず眺めやる夜は

夜のほごろ小草に露の玉おきて物音なべて還り来むとす

しづもれる樹ゆゑとく知るくれなゐのまばらに見えて秋は闌けゆく

たまかぎる夕さりくればかへり来む言葉の園に遊ぶたまゆら

いそのかみふるの中道なかなかに笛吹きすさぶ闇はしづけし

のどやかに草食む牛と思ひしがあひ食みあひて身をば食みたり

瑠璃色の勇氣が裁く正義あり議定書離脱せし大義あり

タツクルのなかにボールは隠されてアメフトかくも戦争に似る

さだめなき世はまさななる空深く赤き風船とどまれよいさ

角ゆゑに狩らるる犀と神ゆゑに狩りあふヒトといづれぬがたき

葡萄酒とパン分かちあふ聖餐に使徒書はいへり 愛しあふべし

いたづらに時はへめぐり揺りもどり終末時計今何時だらう

門に貼る鍾馗の札や効能は魔除風邪除疱瘡除とぞ

産土の神忘れたる我等なりとほき杜へと着飾りてゆく

逃水の果てにあるもの追ふやうに空しくあがくひとりづつひとり

巡礼のそびらに雪は降りつみてとけゆく夢は砂のごとしも

かへるみの手向けの幣も振る袖も時とふ旅を齎ひてゐるか

雪起し鯉起しとや白山を鈍雲低く流るる向かう

蒼穹の果てに挑みし力もメありジヨナサンきみはチャック・イエーガーか

かくも長き不在　といふ傷跡の残らぬ戦など無きものを

予定なき日曜の朝くつろぎは詩歌の言葉拾ひはじめ

はじまりは一個のボタンの掛け違ひふたりの視線が食ひ違つてゆく

被曝者の寸断さるるゲノム地図読めねば身ぬち神迷走す

み吉野のもみぢを幣と見るまでに散りつつあるか風のまにまに

うつろへる色とかをりをまつらはす菊人形の眼にある虚空

ほ乳類齧齒目リス科またネズミ科つぶらなる目に変はりなければ

ひさかたの天つ少女が唐衣振る袖のなき新嘗の世か

天空のオデュッセイアはメーテルの旅の途中の銀河鉄道

カウボーイハットの似合ふ男なりひとつ写象にこだはりをれば

蔵はれる樹木の耳もなき溪を赤新月ののぼりゆかむか

アメリカの自由の風は異端児を嫌ふと知つたベトナムの頃

時じくそ目覚める兵士ありといふ間なくその通える道に

人形の家をおほへる雪あらば夢のほごろにさめざらましを

標なき三叉路ありぬ選ぶとはつひには捨つることなりぬべし

新世紀なるベシタンカ、短歌にて恋愛談義電腦に咲く

きみのみた臍月若葉はげざやかにいぬる霜月零れてやまぬ

波の花みぎはの池にさかりなる桜紅葉の寂けきタベ

天翔る獅子はのみどの奥ふかくおらびるにしか　星の雨降る

白銀の鱗装束般若とふ智慧の面を授かるあはれ

蕭条とふれる漱石山房の一夜にきみは夢見つらむか

蒼穹に吸はれゆくもの見つめつ風に吹かれて風に震へて

くるこない喪はあくるともあかからぬ君ゆゑからき壽ぎの状

秋闌けてひとり寝る夜のほどろにはみな美しく夢にたつ見ゆ

ホセ・クーラのテノール歌ふ アイーダ と わがことならぬ悲劇ゆゑ美(は)し

美しきもの見しひとよハンニバル勤しみなべて真紅の宴

ボウフラを花のお江戸に売り歩く月夜の利左のその後や如何に

ハンマーで毀てぬ壁は shieldか barrierなるかそれも命題

源氏名のやうな名ばかり続きぬし名簿にゆかしと 子 の名前見つ

生(あ)れかはる星のたまづさ伝へけり恒河沙わたる原子のドラマ

モノリスも今だ見なく暮れむとす2001年HALは乱るる

選別の思想極まるニュートピア GATTACA ハウスのサプリメントな夜

異界へと招かれやすき年らしいハリー11千尋10歳

苛めつ子世にはばかりて平成も苛められつ子はびこらむとや

たもとほる野辺に凍て菊あはれなるきみが心の花にあらねど

電腦の空に浮かびし円盤のいらへぬ朝のさびしけるかも

史上初SOSを打電せしタイタニック号いまだ深海

黒潮は滔々流る水底に母父(おもちち)恋ふる靈をとどめて

草枕朧月夜にまとひたり蕪村句集の春の夜のごと

幕切れはいつもベルの音シンデレラ・エクスプレスは行つてしまつた

じりじりとやかるるトタン屋根の上マギーは何を見てゐたのだらう

ゆくりなく吹雪に帰路をとざされしきみ今機上未だ千歳か

波照間の珊瑚月下に生るとき母となりたき子宮蠹く

原始地球あまた光に溢れいつ混沌の海われもいだきて

アマデウス言葉遊びにうつけども至福に満つる五線譜のつへ

訂正 一筋の漣はありけむ深き昏き川隔つともきみと行くため

一筋の漣はありなむ深き昏き川隔つともきみとたどらむ

白鳥となりし皇子あり羽曳野のかの陵にしつもりてをり

考えてみれば殺戮東征の皇子を古事記の叙事詩といふも

茜さす紫雲ぞ愛しけやし恙なき日のしるしと思(も)へば

風花の舞ふ日御堂に置かれぬし白き棺も家族の歴史

フェルマーの定理解かるる数式の美しかりき曼陀羅のごと

一筋の漣はあらまし深く昏くひとのこころに激める河の

遮断機の向かうにきみは立つてゐる他人のかほをつくるひながら

恩寵とつひにはならぬわれの血の半ば遺さる聖誕の朝

フィヨルドの海にたなびく茜雲永遠の叫びに震へるにしか

和魂（にきたま）と荒魂ありとふバリ人は諸神祀りてさきはひ満てり

いとやすくケータイ番号かはしをり道行く人をたれと知りてか

天網は恢恢なるや繕ひを忘れほころぶ一枚の布

世にあらむかたちに六つの花びらとなりて降りくるたまゆらの夢

またの世にさらぬ別れのなくもがな千代に八千代に祈りきつらむ

青空を歌ひて悲し陽水の高き声音の吸はれてゆかむ

玉の緒の絶ゆることなき言の葉のにぎははしけれあらたまの年

まみるるはなにゆゑさくるすべもなきくれなゐの海わたくしをつつむ

若冲の翼そびらに生ほすがに太鼓打ちてむ鼓動はやまず

伊吹山荒ぶる神は白き猪となりて猛りぬ雪降りやまぬ

いまだ見ぬ神を思へり群青の宙に暗なす鶴の渡りに

隈取りのシスあらはるる宇宙戦黒沢映画の栄華しのばゆ

南洋に怪獣あらはれやすしとふ猛獣ならば身ぬちにゐるが

託言おほき身を赦さざる赦文鬼界ヶ島に僧都果てにき

ミカエルの城のめぐりのあやにしき砂地に行きてたれかは帰らぬ

砂糖菓子のはるる刹那はらほると零るる夢をたれか見ざりき

喜びも悲しみも幾歳月 をふりほだしとはきづなならむか

ふるさとは旧る里にして経る里か思へば幾地めぐり来ぬらむ

ポンペイのかの一日を思へ繁栄のつひえるときは瞬時にやあらぬ

森ふかき国のまほらに愁ひつつかくれんぼの鬼うたとたはむる

倦怠のなかですべてが始まると夕陽見つらむひとのありしか

とほきよりまよひ来にけるひとひらの雪くちつけて水に還さむ

いくたびも雪の深さを尋ねける立つことかたきひとの習ひに

二十億光年めぐる法則としてニュートンの林檎落つるや

日脚のぶ電車に語りまどろみて寄り添ふ老いを安けくも見つ

あかねさす紫草の生ふといふ武蔵野あはに雪や降りける

みちのくの七つ森とやしらじらと雪月ありぬ汽車は旋りぬ

くらき玻璃にしじもれるものひとりみて自由軌道をかける汽車はも

きさらぎの望月の花たが願ふけふ望月のすみすみてゆく

おのが夢たたみて眠る冬の蝶翅ふるはするはつかなる音

ゆくりなく悲しきこころ知りしとき添ひにき歌を忘れやはする

哀しみはたとへば樹液ねつとりとまとはりついて透きとほるもの

とりどりの象を扱ひて雲流れまばゆきまでのきさらぎの空

伝説は濃きくれなゐのかたちして崑崙黒とふ椿はありぬ

タトウインとふ砂の惑星境界ははぐれものゆゑオアシスならむ

なにげなしまろくなりける空の色重きコートを脱ぎにけるかも

セピア色水色薔薇色思ひ出をたとふる色はさまざまなれど

海石榴市(つばいち)の八十の衢のかしましく水さすものぞ歌垣あはれ

たらちねとたらちめたらちをたらればの小言おほしき昔しのばゆ

果てもなき空の青鈍過飽和を告ぐるや春の雲降りける

クラインの壺のごとかる日常のえうなぎものとたはむれしころ

きさらぎの書棚ゆいづる百鬼園狂ほしきまでの回想読みぬ

クムランの洞窟ふかく死海文書あり永遠の黙示あらぬや

さまよへる湖へヘディンの漕ぎゆきし一艘の舟俣ばるるかな

魔王ーそのアリアやさしく歌ふゆゑ奪はるるもの少年と呼ぶ

形神は蒼さかげりの玻璃に似てくだかれやすき少年の日々

春の夜のたふときあはれ求めなば宵あけぼの中といふらむ

鶯の初音聞きてむ一雨の降ること春のめざめにければ

白魚の白き一寸かなしびてわがまなうつらにみどりこ泳ぐ

ギリシアの哲学以前文字ありき饒舌なるもの と呼びき

物見高きひと集まりぬめづらかな鳥の渡れるあつかひ草に
容るる水なき土器のひとつある冬ざれにける庭の一隅

道の辺の雑草芽ぐみつつあらむ犬ふぐり咲く春は来にけり

数ならぬ身とふ法師のなかなかに名にこだはりてあはれきさらぎ

くくもりて睦月如月白蓮は剖るるまでの夢にこもれり

鳥曇・霞・陽炎・春の間 朧なることつるはしからむ

鎌倉は美男におはずみほとけのきみに菊酒今宵酌ままし

ふけぬらむ空にぞ月はかかれどもさゆるばかりに見がてにあるぞ

長月の夜は有明を待ちながらはかなき秋ををしむべらなり

鴉色はカラーチャートのなかにあるたれも知らないあしたのやうに

いはれある磐余の池に鳴く鴨は今日渡れるや秋闌けぬらむ

露の世は露の宿りに露の身を露の間おきて露ぞかわかぬ

秋草はゆるる絃なれひたぶるに鉦打ち鳴らす虫とあはむに

声なくも夕空さはいるとへるあきつあかねは胸につぐべし

さちかうはきちとかうとのかさねにてくれなゐあるにほふ紫

髪梳くや菟原処女がしくしく黄泉に待たむと今宵逢はむと

獅子庵に二見台あり獅子老の遺墨にめをと岩あるゆゑん

よろづ世に語り継ぐべき名も持たず滅びしもの芒野ありや

一家の火影に萩のなまめきて一夜の夢のやすらげくこそ

虚像のみとらふ鏡よ等距離にふたりのわれがわれをまもりつ

金の鳥銀の小鳥に一葉のほひたちぬる秋闌けにけり

人はいさわれは籠らむ近江道の鳥籠（とこ）の山にぞわれは籠らむ

秋なれば木の実艸のみひろはむよそらに木立のいまは何色

働くこと休めるときに手を見たるひとりこのわれにかへらむときに

こがねづく田の面（も）の穂波ほのぼのと霧たつ朝の風は知らゆな

芒野に漣のありとや西風（にし）吹かばそよその路をわたりかゆかむ

夕占（ゆふうら）に下駄を投げてし秋天の雲ちりぢりに明日どうなる

穢れより生（あ）るるものあり白妙の天花あこやのまきてかなしも

帰りなむ籬に花のしをるれば侘び寂び昔しのばむものを

土にふらば土に還らむ雨や葉のごとく都会に人はふらむか

歳時記をさいさいめぐりめぐるまに夢に逢ひたる人と逢ひたる

桜さくら桜もみぢて散りぬべし無腸の夢のめぐれるところ

戸隠の鬼女ともならむ夕紅葉からくれなゐとはかなしきころ

名画座をおもへば追憶・旅愁とふわがのすたるぢあに邦題ゆかし

枳殻の垣をくぐらむいにしへに塩竈ありぬしほくむために

散ればこそめでたがるらめ水無瀬川桜もみぢて下ゆ流るる

紐育・倫敦・巴里を銀幕に見しころとほくあくがれとほく

うつせみのひとなるゆゑにこころ和（な）ぐ山ゆき野ゆきあずさは発ちぬ

神無月降りてきさつな空だから降りみ降らずみ冬ざれにける

枕辺にすゑたる鶴の旅だたねひかりながるる見晴の空に

薔薇をつむかなしき手と手あらはれぬ現世忘れゆく二十五時

闇鍋がお好み焼きか知らねども蓼食ふ虫のかくこそありけれ

縦のもの横にするがに時折は些細に視点変ゆる大切

美しき薔薇に棘ありさりながら美しからぬわれに棘あり

はてしなき議論の後の一碗のココアほろほろ苦く甘かり

言ふは易く行ひがたき性なれど無為自然とふ道のほのぼの

きみならでたれにか見せむ初冬の空にいもせの虹かかりしを

夢はいつも帰りゆきなむ追分に凍みこほりたるのちのおもひに

からまつの林を過ぎてからまつの韻（ひびき）幽けしかそけきゆふべ

クリスマス商機迎へるティファニーに群れる若者何故に若者

公園デビューなる項目のあらはれて肥大化する育児マニユアル

つばぎの黄はひかりいろ石の間にだんまりだまりひともしをりぬ

文と文のあはひに生るるみづからに笛吹きやれば目覚めしわれは

気多の海堺の海の遠鳴りに耳をすまさむわれも海賊

耳すこしとほくなりたるたらちねの血筋なるかな超個人主義

怪文書作成講座見るやうな東海学園 共生 思想

西国の満願寺へとあまたひと運びし鐵路錆びにし鐵路

類は友となりたる子らに思ほえず同窓の母三人（みたり）まみえり

風花をたまづさにかへおくらばや冬ざれにけるきみの街へと

星はスバル六連星（むつらぼし）にて浪漫の燭かかげたる明星その後

警沢は素敵と返す落首ありかかる洒脱をほのぼの思ゆ

遙か釧路へ流離ののちの歌なればただ一握の砂のごとしも

極まりの月はなかばに満ちゆかむ月に焦がるるこころ知らゆな

雪ふらば見つつ偲はな逢はざりし雲に隠るる生駒偲はな

半世紀歌ひつがるる紅白の女王にとりのひばり在りし日

縄張りを広く持たねば生きられぬ猛禽夕力目絶滅危惧種

バルチック艦隊通過予想図に対馬はとほき神風の海

瓜実の銀杏返しのをんなめて漱石の恋今にせつなし

六地藏一の地藏はしづもれる大き公孫樹の傘借るやうに

親業といふ言葉あり業ならばなる程子育て苦痛なるべし

出がけに必ず腹痛ありて友我を万年登校拒否児といひぬ

星ひとつ樹上に飾りをへながらベツレヘムとは遠き国原

燐寸より手燭にうつす火（ほ）の色のうちにこもれるあをよりあかし